

オーガニック建築Ⅰ

英國のエコビレッジ
『ホツカートンハウジング
プロジェクト』
10年前、雑誌で英國のオーガニック建築特集を見てから、どうしても本物が見たくなり、英國まで出かけたのはそれから3年後の春のことでした。

最初の目的地であるオーガニック建築を目指し、ノッティンガムシャー郡サウスウェルに近いエコビレッジ『ホツカートンハウジングプ

ロジェクト』を尋ねた時は、あいにく小雨模様でしたが、放牧された羊と鶏が出迎えてくれました。1998年に完成したプロジェクトとは、27エーカー（約33000坪）の広大な土地に、羊や鶏の放牧地・パーマカルチャーガーデン・果樹林・大きな調整池があり、5世帯が暮らしていました。駐車場に車を止めて敷地内を見ると、ただの丘のように見えたところが、実は半分土に隠れていて、連棟長

度を過ごせる省エネ住宅が実現できていたのです。太陽光発電システムや風力発電などの自給エネルギーと、雨水や調整池の水を浄化して、生活水に変える浄化システムを完備。毎日、数時間の農場作業や管理作業に従事することで、野菜、肉、卵、魚などの食料も、ほぼ自給自足できる環境が整っています。このハウジングプロジェクトは、専門家や学生、一般人を対象にした有料のセミナーやワーク



屋根も壁もガラスで覆われたテラスと前庭は開放的で気持ち良さそう



魚釣りやカヌー遊びができる池が目の前にあり、裏手は広い牧草地が広がる何ともうらやましい環境が揃っている

素を組み合わせた「コミュニティ」がエコビレッジで、世界的にはすでに多くの国で、さまざまなスタイルのビレッジが出来あがっていました。日本では、大きな「コミュニティ」を形成するのは難しく、小さな集合体、又は、プロジェクトとしていくつか存在しています。僕たちも、そのころはオーガニック建築を目指し、伊達工房が集まる住環境としての「伊達工房レッジ」、環境に配慮した賃貸住宅「当別工コアパート」などが知られています。エコビレッジは、環境に配慮した暮らしを目指して、全員が参加する「コミュニティ」のことですから、日本に古くからあった田舎の集落なども、ある意味、エコビレッジでした。英国へ旅立つ数年前に、京都・美山町の古民家集落『かやぶきの里』に遊びに行つたことがあります。「日本一の田舎」を自称するだけに、

文・西條 正幸

自然派空間デザイナー

北海道伊達市出身。

自然と人にやさしい建築デザインを専門とし、建築デザイン事務所ビオプラス西條デザインを主宰。

オーガニックな暮らしをライフワークに、

仲間との有機農園やマーケットの運営、

講演会やワークショップなども企画、開催している。

昔話に出できそうな風情で、かやぶき屋根に土壁の古民家は、まさに最後は土にかかる、理想のエコロジー建築でした。海外で刺激を受けたけど結局ルーツは日本にあります。僕たちは知らない間にずいぶん忘れ物をしてしまったな…と感じることが多くなってきました。

オーガニックとは、「有機的な」「本質的な」という意味があります。衣・食・住の本質を学ぶ場として、毎年3月に札幌で「オーガニックカレッジ」を開催しています。

このプロジェクトが始動したころは、集まって住む「コープラティブ住宅」、持続可能で環境に配慮した「エコハウス」、健康に暮らせる住まいづくりの「健康住宅」などを目指す運動や実践が始まつた時期もあります。これらの要

屋式の集合住宅が建っていた、と言ふより埋まっていたといった方がわかりやすいかもしない。住宅の南面が総ガラス張りになつたパッシブソーラーデザインで、北面は、コンクリート構造に防水シートをかけている。そして、土からハネ出したガラスの前室は、木フレームと木製3層ガラス窓で構成されていました。厚い断熱層に覆われた床・壁・天井は、蓄熱性能を保ち、熱交換換気システムなどの設備によって、熱損失が少ない、ほんのわずかな電気暖房だけで冬を過ごせる省エネ住宅が実現できていたのです。太陽光発電システムや風力発電などの自給エネルギーと、雨水や調整池の水を浄化して、生活水に変える浄化システムを完備。毎日、数時間の農場作業や管理作業に従事することで、野菜、肉、卵、魚などの食料も、ほぼ自給自足できる環境が整っています。このハウジングプロジェクトは、専門家や学生、一般人を対象にした有料のセミナーやワーク

ショップ、ビレッジツアなどを開催し、コープラティブハウスやコビレッジといった持続可能な暮らしの「コミュニティづくりの実現」のための研究施設となっていたのです。